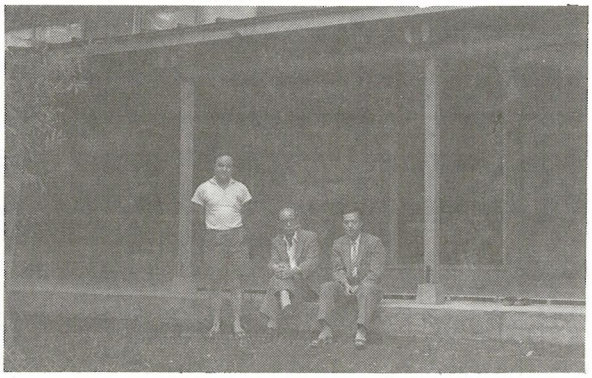
# 史料室だより No. 27

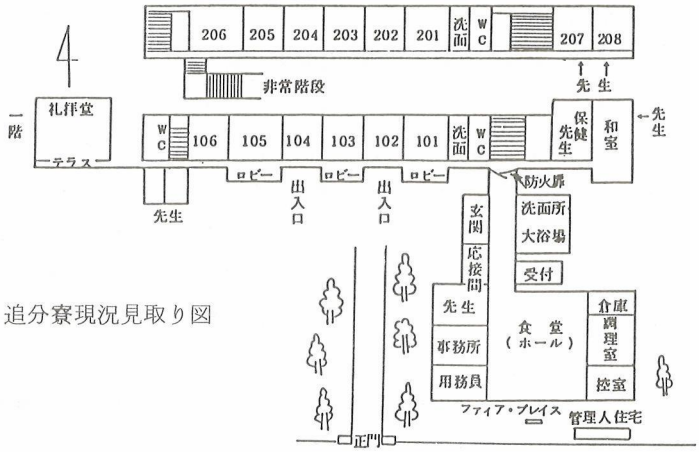
東洋英和女学院史料室委員会
発　行　1986年11月6日


## ―― 追　分　寮　の　27　年 ――

昭和36年の追分寮

左から水野、井上、栗原先生
昭和36年増築した礼拝堂前で →






追分寮現況見取り図

# 「追分寮について」

外崎　長三郎　元小学部長（昭16.2～昭42）に聞く

1981.5.11
於　　小学部
聞き手　史料室委員
採　録　加藤　閑子

委員 ― 今日は、先生が追分寮を造るということになって、現地との細かい交渉をなさり、それが出来ていく過程など他の者が知らない部分があると思いますので、そういうことも話して頂き、同時にまた校外施設というもの、きちっと専属のものを持つということによって当時は学校教育の指針をどういう所で持たれたのかということも含めてお話を伺いたいと思います。

外崎 ― 追分寮はいわゆる夏期施設というけれども英和流にいうと夏期学校の施設ですね、私は夏期学校というのを知ったのは東洋英和に来てからです。英和という学校には夏期学校というのは当然あるべきものだという考えなのですが、他の学校では必要性を感じないものなのではないでしょうか。私はここに来て眼を覚まされました。

私が英和に来たのは昭和16年ですが、学校は独自の施設を持っていました。それは野尻湖畔にＹＭとＹＷの中間にあった宮沢という施設です。収容力は30人位でした。

キリスト教主義を土台にしている学校は、ああいう所で寝起きして、朝の食事からすべてキリスト教用式で訓練するということ、本質的にいうとスキンシップというようなものが東洋英和の教育に欠くべからざる要素だという思いが強かったのです。ですから追分寮が生まれたのは当然でした。

そもそも夏期学校というものを初めたのは昭和22、３年頃、御殿場の東山荘に於いてで、ミッションスクールでは、東洋英和が最初だったと思います。疎開地、出流山でも昭和21、２年頃夏期学校を２回位行っています。出流山のお寺では英和が来るというので、その頃プールを作りました。

では何故追分寮を作ることにしたかということになるのですが、池袋に男子の立教小学校が出来て、英和が行く東山荘に進出してきたのです。我我が閉会礼拝をしてほっとしたすぐ後にやってきて荷物を置く。そういうことがあったので、あとで協定を結んでやりましたが、だんだんにこちらは東山荘と星野温泉と２箇所に分けてやるようになりました。戦後、夏期学校は義務づけてやっていましたから、３、４年の低学年が東山荘、５、６年の高学年が星野温泉、これを２、３年間続けました。こうなれば移動教室ですね。東山荘は立教小学校等利用者が増えたために自分の領地がだんだん狭められました。星野といえども温泉地で旅客相手でしたからね。けれども亡くなった星野さんという人は、熱心なクリスチャンでしたから歓迎してくれ、そして、あそこには小さい礼拝堂がありましたからそこで礼拝をやり、グラウンドでキャンプファイアをやったりしましたが。そこで思ったのはとにかく借り物は駄目だということです。

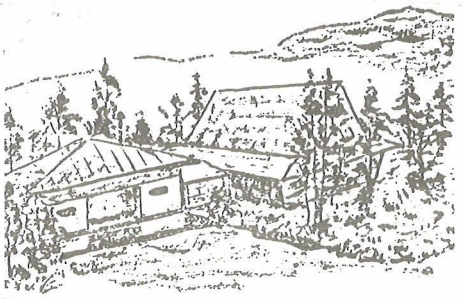
委員 ― 随分先生は東山荘の予約の日にちを取るのに苦労なさいましたね。

外崎 ― 自分の施設でなければ存分に教育は出来ないという気持ちでした。では野尻があるではないかということですが、野尻は戦争中に売ったんですね。それで野尻に求めることはお金のかかることだから長野先生への遠慮がありました。独立して小学部が夏期学校を持つことは実は当時困

難な状況にあったわけです。何故なら、ここ（今の小学部）の土地を買って建物を建てたが、まだ食堂と講堂が出来ていない。その上体育館と独立教室を第二期工事でやるという話でした。ですからこれ以上言い出せなかったわけです。野尻にはYの施設もありましたが、当時野尻へ行くのに汽車で片道9時間かかり、汽車は混むし小学生にとってはとても体力的に無理でした。

そこで追分に目をつけたというのは青山学院に行っていた私の息子が堀辰雄の小説を読み、追分に行って追分が好きになり、私も追分に行くようになったことと、追分には青山学院、東京女子大というミッションスクールの寮があるということ、昭和32年頃1200坪を80万という安い価格で買えるということで追分に落ちつきました。ここに落ちつくまでは旧軽井沢の辺りなど随分探して歩きました。まだ追分は水が悪く、当時は今のようなバイパスもなく埃道でしたからまだ不人気だったようです。このようにして今の所に落ちついたけれども、何しろ大きな樹がない、部落のはずれで淋しい場所でした。樹の大きい青山学院や東京女子大の寮を羨ましく思いました。

さてこのようにして追分の土地は買ったけれども、追分寮よりも先にこちらの建物を整備したいと思いました。礼拝するところもない、給食はバケツで各教室に運んでくるというのはまともじゃないという気持ちでした。それで後援会を動かしました。ところがこの後援会の席上追分の話が出て、まるで瓢箪から駒が出たように500万円寄金しようという申し出がありました。こうして、麻布校舎の建築を進める中で、追分寮は昭和34年に完成しました。



軽井沢 追分寮

完成後最初に行ったのは5年生の子ども達でしたが、その中で誰だったか忘れましたが二段ベッドに座って「先生よかったですね」と言った言葉は、こちらの苦悩を知っているかの如く非常に印象的でした。食堂の天井の梁を見て、子どもはどんな反応を示すかと見ていると、「お伽の国みたいですね」という受け取り方をしていました。

委員 ― 先生が一人一人柱に乗せてやって艶がでるから最初は滑れ滑れとおっしゃって。

外崎 ― 吉野杉です。施工者は木場の人、設計者は渋谷さんでした。設計の段階では、玄関入口ははじめ右の方（今の調理室）についていたわけです。けれども入っていきなり玄関では味気なくて夢がないから、青山や女子大の奥まった感じが羨ましくて、少しは山の感じを味わわせてやりたいという配慮からわざとタツノオトシゴの腹を回るような感じにしたわけです。そのことが結果的にいいか悪いかわかりません。プラスマイナスあります。マイナスの方は風が入ってきて調理場の暖かい風がこちらへ流れてくる欠点があるわけですね。

幸運というか、大きな意味で神のご経綸のうちにあったと思うのですが、水の悪い所に英和の工事にかかる前に上水道が通りました。ですから初めから水洗が出来ました。そして寮が出来ました。たしか翌年バイパス、今の国道が出来て車のひどい埃から開放されました。その結果計り知れない恩恵がありました。バイパスのバス停も「追分中央」で英和のために出来たようなものです。子どもだから何か事故があって病院へ行くにも道路がよいというメリットがあります。

追分寮は長野先生が全部私に一任して自由にやらせて下さって、小学部の夏期学校の為に造ったけれども、小学部だけで独占しないで、高等部の方と運営は一緒にする、ということで私が運営委員長、井上先生が責任者で、運営委員会はいつも一緒にここでやりました。これはよかったと思います。そして学校の経費は使わずに独立採算でやってきました。勝手なことをやっていたと思われるでしょうが、これは先生たちの意欲の現われであって、畳の大きな部屋については私の構想よりも井上氏と、青山の短大に行った水野誠さんの構想が入っています。ことに水野さんの構想は積極的で、ここはお手洗い、ベッドはこうなった方がいい、畳の部屋はこうした方がいい、といって意見を出してくれました。そして教団の会合施設がまだ足りなかった時でしたから、そういう所に解放して貢献しようと、あそこで教団の大きな役員会も何度かやりました。

委員 ― 今日は大変面白いお話をありがとうございました。

（文責　朽木　久子）

## 昭和61年度軽井沢追分寮使用状況

| 日 | 6/30 | 7/1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 曜 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 | 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 | 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 | 日 |
| 使用団体 | 中1オリエンテーション 1・2組 98名 | | | 3・4組 98名 | | | | 旭幼稚園 45名 | | | 東洋英和幼稚園 58名 | | | | | 小1－1 49名 | | | 1－2 48名 | | 2年 87名 |

| 日 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 8/1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 曜 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 | 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 | 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 | 日 |
| 使用団体 | 3年 84名 | | | 4年 88名 | | | 5年 89名 | | | | 6年 86名 | 個人（1人） | | | 個人（3人） | 代田教会 130名 | | 富士見教会 30名 | 蒔田教会 40名 | 個人（4人） | |

| 日 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 曜 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 | 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 | 日 | 月 | 火 | 水 | 木 |
| 使用団体 | 音楽部72名 | | 演劇部39名 | | | | | 放送部31名 | | | 英語劇部37名 | | | | | 安藤記念教会 70名 | | |
| | 文芸部13名 | | | 中・高クラブ活動　計192名 | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 個人（5人） | | | | | | | | | | | 渋谷教会 50名 | 個人（8人） | | | | |

# 昭和40年代の追分寮

小学部　野　田　文一郎

史料室委員会から追分寮のことを書くようにとの原稿依頼を受けましたが、資料が全く見つからないまま、おぼろげな記憶を頼りに記してみました。記憶違いや思い込みも少なくないと思いますので、加減してお読み頂ければ幸いです。

## Ⅰ. 追分寮管理委員会

昭和37年に小学部に就職して間もなく委員を命ぜられてから、およそ10年間ほど管理委員の仕事をさせて頂きましたが、その頃の委員は、外崎長三郎（代表者）、井上健之助、江良顕三郎（会計）、水野誠、栗原正己各先生と私の６人だったと思います。昭和42年外崎先生ご退任後は江良先生が小学部責任者となられたため、私が会計の役を引き継ぎました。さらに水野先生が青山学院に移られ、井上先生ご永眠（昭和45年）の後は、中高部の腰山周作さんが委員に加わり、小学部２人中高部２人の４人の委員が中心になって追分寮の管理運営に当ってきました。委員会の主な仕事は、開寮作業、学校行事中の管理、学外使用期間中の管理、閉寮作業、年度会計決算の確認と残余金による次年度のための施設営繕・設備補充の計画及び実施などでした。委員が寮に出張して管理の仕事に当る時は「管理者」と呼び、現地常住の「管理人」をも含めて寮全体の責任を持ちました。

## Ⅱ. 追分寮の働き人たち

1. 管理人 ― 私が委員になりたての頃は割田夫人が管理人でした。開設当初の管理人は佐藤さんという軽井沢町役場の人で、後に血縁に当る割田夫人に引き継がれたようです。割田さんはご主人と共に今もある管理人住宅に住んでおられましたが、地元の炊事手伝人の依頼、薪の買入れ、食事材料の仕入れ、水道・電気工事、営繕修理など地元での調達・工事依頼など一切を引き受けられ又、炊事人の一人としても働かれました。住宅無料提供ということで特に管理人手当もなく、開寮期間中の炊事人日当だけを差上げていたのですが、年間通して現地に住み、閉寮期間中も寮の保守管理に当って頂いていたので、住宅の改善とか管理人手当などの経済的処遇については年々委員会との間でやり取りが絶えませんでした。後にご主人が千が滝の観翠楼に住み込みで働かれるようになり、程なく割田夫人は管理人を辞められました。その後は土屋夫人が管理人を引き受けてくださり今に続いているわけです。土屋さんのご主人は当時松葉タクシーの運転士をしておられましたが、管理人の処遇その他は割田夫人の場合と同様でした。土屋夫人は非常に実直な方で、当初まだ管理人の仕事に慣れていない頃も、私たち管理者の願いを忠実に実行してくださり、なかなかに得がたい方だと思っていました。

2. 用務者 ― 特にそう呼ばれていたわけではありませんが、佐久村から通っておられた60才過ぎの小柄な児玉さんが、ボイラーマンを兼ねて、トイレ・廊下・宿室・食堂・礼拝堂・屋外などの清掃と寮全般の雑事を誠実に務めてくださり、学外利用者からもとても評判の良い方でした。当時寮には自転車の他にバイクが１台ありましたが、好酒家の児玉さんは夜な夜な遅い入浴をすませてからひと口頂いた後で、バイクに乗って旧中山道の下り道を佐久の自宅まで帰っておられたようでした。ある朝の事、顔に赤チン手に包帯という姿に接してびっくりしましたが、石ころの多い旧道の下り坂をほろ酔い気分でバイクで飛ばしていた時、手許が狂って転倒したと笑いながら話されま

した。元気な時は自転車で通っていたが、近頃朝の登り坂が苦しくてバイクを使わせてもらっているとのことでした。江良先生とは特に仲良しで、閉寮出張の時など、手当をもう少し考えてほしいと一杯気嫌で江良先生にからんでおられたようですが、翌朝になると、きまり悪そうな顔で頭かきかき詫びを言われるほどの好人物でした。寮では他に代えがたい良い働き人でした。

3. 地元の炊事人 ― 管理人の他に地元の農家の（大ていは）夫人２～３人をお願いしておりましたが、毎日４人が地元の人（３人の日もある）東京から２人で計６人位で炊事が行われていました。年々学寮が増えるにつれて、地元の炊事手伝人を得ることが難しくなり、昨年までずっとお願いしていた人が、今年は手当のよい他校の寮に移るといったこともあって、地元の炊事手伝人の手当の問題は委員会としても頭を悩ますことでした。後には家庭の都合もあって早出（昼食片づけ迄）遅出（昼食準備から）の２交代にした時期もありました。地元との結びつきを大切にして現地雇用・現地調達の原則を守るように努力されてきたのですが、卒業生の援助や学生アルバイトによっても炊事人の人数が補われてきたことは、大変にありがたいことだったと思います。東京に住み東京の学校に学ぶ若者たちと地元の主婦の方たちとの間に一つの仕事を通して起こる交わりは、学寮のためにも地元のためにも、大切な意味をもっていたように思います。

4. 東京からの出張炊事人 ― この中には小学部の給食員や幼稚園の給食指導者も含まれますが、さらに中高部卒業生や短大のアルバイト学生など多くの人々が含まれます。当時はずっと小学部長が全体の責任者になっていましたので、小学部給食員は学外使用期間中もノルマのように何日ずつか交代しながら炊事のために出張されました。度重なる出張回数や学校行事の場合と校外使用期間の場合との日当の違いなど隠れた問題も少なくなかったのですが、追分寮の意義を守り立てていくために気持ちよく熱心に責任を果たしてくださいました。卒業生やアルバイト学生の依頼は中高部の委員の先生方が窓口になっていましたが、他のアルバイト料に比べて決して高くはない日当に甘んじて働いてくださった方々の中には、愛校心と奉仕の心で、寮の仕事を支えてくださった方が多かったように思います。

5. 調理責任者 ― 前項と重なりますが、追分寮の食事のメニュー作成や調理指導に当られた先生方は、主として中高部家庭科の先生や小学部の栄養士の先生方でしたが、今思い出されるのは、中高部の南波シゲ・狩野歌両先生や、小学部の佐藤ウメ・野田一江・氏家カク子各先生方ですが、その他にもたくさんの先生方がこの仕事に当ってくださったと思います。追分寮の食事は必ず食前に感謝の祈りが行われ、学外使用の時は１教会だけで使用する場合よりも２～３教会で使用する場合や、加えて３～５人の家族や同好者のグループが１～２入っているような場合も多く、大ていは一番人数の多い教会の方が全体を代表して祈りをされました。食事の初めか終わり頃に各教会やグループが互いに紹介し合って交わりが行われたのも追分寮ならではの光景でありました。遅れてテ

ーブルにつくグループや幼・小児のための特別メニューの配慮など、炊事の方々は細々とした点まで利用者の求めに応えられ、大変融通のきいた心使いが皆さんから喜ばれ感謝されたものでした。

6. 管理者 ― 管理委員が管理者として出張勤務する場合は、よく「番頭」と呼び慣らされていました。旅館の番頭さんのようで私はその呼び方がいやでしたが、実際には番頭以上に細々とよく働いていたように思います。朝早く起きて食堂・玄関・廊下・礼拝堂のカーテン・窓をあけ、夜間点灯していた5～6か所の消灯で寮をひと回りします。これは早朝出勤される児玉さんの仕事でしたが、私もよく一緒にしていました。食事材料その他の納品があり、クリーニング店の出入りは2～3日おきにありました。当時はまだ安中の店から来ていたので、新しい団体が入寮した時にシーツ類が間に合わなくて気をもむことも時々おこりました。後に料金のこともあって追分近辺の店に変わりました。利用団体の退寮は大ていは昼食をすませてからでしたが、時には朝食後に退寮ということもありました。退寮の都度使用料の受け取りという面倒な仕事があったわけですが、日毎に宿泊数や食事数が違ったり、食事毎に人数が変わるような出入りのはげしい団体もあって料金計算が大変でした。なるべく利用者に有利な計算をしていたように思います。恐らくそんなやり方をした管理者は他にはおられなかったかも知れませんが、利用者のことを考えるのが先で、寮会計のために少しでも多く……とは考えませんでした。退寮団体と入れかわりに入寮団体を迎え食事数や部屋割の確認をしますが、男女人数比の変更とか講師用個室の求めとか、事前の申込内容と違うことを入寮時に知らされて困ることが度々おこりました。食事数が予約を上回る時には炊事の方を四苦八苦させる結果となり、数的に水増しのきかないメニューの場合は炊事人や管理者の分をふり代えるということもありました。入浴時間は比較的早い時間帯に定められていましたが、教会の修養会が夜遅くまで続くと、夜中に入浴を希望される方もあって、利用者の入浴が全部終わるのは10時を過ぎることも度々でした。一日の会計整理と記帳を終え、追分寮管理日誌を書いて入浴をすませ、ベットに入るのは2時頃ということも少なくありませんでした。児玉さんが9時頃退勤されてからボイラーをつけたりするのは寮の決まりに反することでしたが、やむを得なかったことでした。

### Ⅲ. 施設の変化

礼拝堂や和室などが増築されたのは私が委員になるより前のことでしたが、委員になってからのことでは土地買収とか厨房改造などがありました。

1. 敷地の拡張 ― 腰山さんが委員になられた頃、油屋さんから土地を買わないかという話を聞かされ坪9千円～1万円で200坪（500坪だったか？）位の話が進められていました。当時追分寮の運営は独立採算の形で行われていましたが、年度決算残余金は多くて40～50万円位のものでしたから、とても土地資金などなく、学校会計からの出資を長野院長にお願いしたところ半分なら可能だとのお許しが出て、60坪（100坪か？）を買収することになりました。最終的には坪1万円だったと思いますが、栗原先生と一緒に油屋さんへ最後の交渉に行ったことを覚えています。それが礼拝堂の西側と北側にあたる土地で、それ迄凸凹になっていた境界線がその時から今のように真直ぐになりました。

2. 厨房の改造 ― 当初の厨房は南波先生の設計指導によるものと聞いていましたが、先生は少し背が低かったせいか、調理台や洗い場が低く、炊事の方から腰が痛くなると訴えがありました。腰山さんが委員になられてから今のように改造されました。ネズミに荒らされていた倉庫の内装もトタン張りに変え、ボイラー室から給湯されてい

た炊事用の湯も風呂用の給湯と切りはなし、今ある湯わかし器が設置されたのはその頃でした。

3. スカイブルーの屋根 ― 屋根は3～4年おきにペンキ塗りをしていましたが色は決まって茶色でした。井上先生がまだお元気の頃、一度ブルーのペンキを塗ってもらったことがありましたが、委員の中に余り賛成でない先生もおられ、開寮出張の時に色変わりした屋根を眺めて、きれいだ!!と感嘆したり、だいじょうぶかな？と評判を気にしたり、大いに気をもんだものでした。夏期学校の遠足で石尊山に登りブルーに光る寮の屋根を見つけた時は、周りの子たちに宣伝してまわったことでした。遠くから見てもよく目立つ色でしたが数年後塗り替えの時、また茶色になりました。

これで紙数が尽きました。むしろ、日常的な些事にこそ目を注ぎ、そのような事どもを中心に記してみました。書き記しておきたいことはまだ幾つか残りましたが、終わりにいたします。

## 追分寮こぼれ話

野田先生がお書き下さった中から、最後に出てくる「追分寮ホール大屋根の塗り換えに際しての色の決定について」の裏話を、少し書き加えます。屋根を塗り換えるに当って、その色を何にしようかと、時の管理委員会の議題になりました。見本を見ながら次第につめられて、2色のいずれかになり、意見は真っ二つ。井上、外崎、江良組と野田、南部、栗原組です。前者は、何と青を主張。後者は地味に濃茶を要望しました。この時生れたセリフに「明治の青年」という言葉があります。青を強調した明治の青年の心は、まことに若々しいお気持ちでした。

結果は、明治の青年に押し切られました。完成した大屋根を見上げた明治の青年諸先生は、複雑なお顔で「いいよ、いいよ」を連発して居られました。澄みきった軽井沢の空に、文字通りとけ込んでいった屋根を見つめながら。

今も、大屋根を見る度に、その時のお顔が思い浮んできます。　（栗原　記）

**あとがき**　カットの絵は井上先生が中一オリエンテーションのしおりの表紙に書かれたものです。

（中・高部　栗原・浅見・朽木）

## 新史料室オープン

今秋より、長い間委員会が望んでいた史料室がオープンした。昭和50年に発足した史料室委員会は、それ迄に学院が持っていた資料の他に、百年史のための資料収集を始めた。東光会をはじめ、各方面から寄せられた資料は、短大特別資料室の一部を拝借する形で、委員が細々と整理に当った。百周年準備室が出来、百年史の執筆のため収集された資料は、年史が出来上っても散逸しないように準備室できちんと整理されたが、それも百周年後は史料室へ寄託された。

今春、短大が横浜校地に移転した後、従来の短大図書館が法人事務局となったので、史料室も、長い間の間借り生活から解放され、史料室として独立した。学内の機構も、事務局の中に位置し、新史料室室長として小谷事務局長が就任した。現在は、史料室長の下に非常勤として週一回、火曜日に、芝原翠元短大図書館主任が資料整理に当っている。史料室は、元短大特別資料室と共に、短大図書館3階書庫も使用することになり、将来の資料増加にも充分耐え得る立派なものとなった。まだ資料整理の段階だが、利用者もあり、次第に形がとゝのって来ている。火曜日に御来校の折はぜひお立ち寄り下さい。なお火曜日以外は、中高史料室委員まで御連絡下さい。お待ちして居ります。又、資料の御寄贈もよろしくお願いします。